「みゃああん」

「待って下さい、 魎呼さん」

呟いていた。 **魎呼は苛々と足早に歩き出した。先刻から何百回も頭の中で「なんであたしが…」と、**

「魎呼さん、そんな早く魎ちゃんは歩けませんよ」

「歩けるだろう、あいつは元々宇宙船なんだから、飛んだほうが早い くらいだぜ」

「ちょっと、お一人で行かないでくださ…っきゃああ

「はぁ…」

足を滑らせた美星が、 山 の下 へと落ちて行く。

「おーい大丈夫かー?」

魎呼が声を掛けると、

「はーい…何とかー」

と、下から声がした。 「なんであたしが…」

とうとう、 魎呼は声に出して嘆いた。

そもそものきっかけは鷲羽だった。

「お天気も良いから、 魎皇鬼とお散歩して来てよ、魎呼ちゃん」

にっこりと言う鷲羽は、だが有無を言わさぬ顔だと魎呼は思った。

「厭だよ、何であたしが行かないといけねぇんだよ」

「お姉ちゃんでしょう?」

「お前が親だろう」

精一杯、言いかえしたつもりだったが、鷲羽には利かない。

「あたしに思いやりの欠片も無いのは、天地も十分知ってるはずだ」「そんな事言ってると、思いやりの無い人間だって、天地殿に嫌われるわよ」

「あら、そんな事無いわよ。天地殿、最近、魎呼は優しくなりましたねって言ってたも

完全に、鷲羽のデマだと分かっているのに、殊、天地に関しては全否定が出来なくなる。 魎呼は、渋々魎皇鬼の手を引いて、 裏山に散歩しに行く事になった。そして、 何故か

「私もお供します!」 美星も笑顔で付いて来た。

だが、 魎呼は安請け合い してしまった事を非常に後悔してい 散歩だと家を出

花が綺麗だと魎皇鬼が言えば、美星もしゃがんで花を愛でる。虫が飛び跳ねたと魎皇鬼 呼の説得に動じなかった。 魎呼はその時点で、瞬間移動して帰ろうと魎皇鬼に言ったのだが、魎皇鬼は頑として魎 が追えば、美星もそれを一緒に追う。そうしてぐるぐる歩いているうちに、道に迷った。 てから、もう二時間も経過している。理由はこうだ。魎皇鬼がキョロキョロと道草をし、

「魎ちゃん、何か探しているんじゃないんですか?」

皇鬼に尋ねると、魎皇鬼は鷲羽が読んでくれた絵本に出て来た、 あまりにも頑なな魎皇鬼に、美星が言った。魎呼は既に嫌な予感がしてい のために摘みたいと言った。 白い美しい花を、 た。美星が

「駄目だ。そんな、 何処にあるかも分からない花探しだなんて!」

「みゃあん」

「絵本に出て来る花なんて、此処に咲いてる訳がないだろう」

「みやあああん」

からず、自分達はますます迷い、仕舞いに美星が転げて落ちた。 「魎呼さん、そう怒らないでくださいよ。 その美星の甘さに納得した自分が情けない。先刻から探し回っているのに、 魎ちゃんだって、探して無ければ諦めますよ」

美星は這い上がってくると、照れ臭そうに笑った。

「下にも、お花、ありませんでした…」

「はぁ。だから言ったろ!おい、もう瞬間移動で帰るぞ」

「みゃああん」

魎皇鬼は足を踏みしめ、動こうとしない。魎呼は魎皇鬼を一瞥すると、

「ああ、そうか。分かったよ、お前だけ其処に居ろよ!あたしは帰るから」

「魎呼さん!それは酷いですよ、こんな小さな子を置いてくなんて…」

「じゃあ、お前も一緒に残れよ」

ように言い、二人に背を向けた。 美星が居ればますます迷子になる事は分かりきってい たが、 疲れた魎呼 は、 吐き捨てる

くるりと背を向け駆け出した。 魎皇鬼は魎呼の背をじっと見つめていたが、 魎呼が本気で帰るらしいと見てとると、

「あ、魎ちゃん待って!待って下さい」

その後を美星が追いかける。魎呼は、勝手にしろと思った。

(勝手に散歩に行きたいって言ったのは魎皇鬼なんだから、 勝手に行け ば 11 1 美星だ

って、勝手に付いて来たんだから、あたしには関係ない)

そうは考えても、 天地の残念そうな、 その時 ガッカリした顔が頭に浮かぶ。 ク ソ !魎呼は足元

きやああああ

美星の悲鳴が聞こえ、魎呼はさっと踵を返した

「どうした!」

魎呼が見てみると、 魎皇鬼の前に、モグラの妖怪みたいなものが立ち塞がっ ていた。

「りょ、魎呼さん!あれ何ですか?私…初めて見たんですけど…」

恐々と美星は口元を振るわせて、妖怪を指さした。

「知らねえよ。おい、魎皇鬼、こっち来い!」

魎皇鬼を美星の方に突き飛ばした。 魎呼は片手にオーラ・ブレードを持ち、魎皇鬼に呼びかけた。だが、 ら、モグラの妖怪を見上げている。 魎皇鬼だって、戦闘能力はあるはずだと思っても、つい心配になり、声を掛けてしまう。 仕方なく、 魎呼は魎皇鬼と妖怪の間に割って入り、 魎皇鬼は唸りなが

「美星、魎皇鬼連れて逃げろっ」

「でも、魎呼さん…」

「早く!」

「魎ちゃん、動かないんですけど」

魎皇鬼はまだ唸ってる。

「魎皇鬼、良いからお前は美星と一緒に行けよ!早く!」

瞬間、 った。 魎呼は妖怪を睨みつけながら言ったが、美星がその手を引っぱっても魎皇鬼は動 魎呼はパッと地面を蹴 魎呼はジリジリと相手との間合いを詰めた。 り上げ、 飛び上がり、 その額にオーラ・ そして、ぐああああと妖怪が吠えた ブレ ドで切りつ かなか

けようとしたその瞬間――

「みゃあん」

魎皇鬼が可愛く鳴いた。

「はあ?」

意表を突かれた魎呼は、 間に弾き飛ばされた。 んと身体を折り曲げた。 予想もしなかった動きに、 つい魎皇鬼の方を向いてしまった。その時、 空中にあった、 魎呼の身体は木々の で、何故か妖怪がぐわ

「うああああ」

はしなかった。 飛ばされた魎呼は、 木に身体をぶ つけたものの、 枝に引っ かかったので、 大した怪我

美星を…) (何だよ、 \sim 急に身体を曲げやがって…。 まさか、 あたしを無視し 魎皇鬼と

魎呼は顔を拭うと、 風景であった。 焦って元の場所に瞬間移動した。 だが…彼女が見たもの は、 平和な

魎呼ちゃん、 どうしたの?そんなに汚れた顔をして」

呼を見る。 帰宅すると、 居間で新聞を読んでいた鷲羽は首を傾げた。 傍に居た阿重霞もジ 口 IJ

替えて来て下さいな」 魎皇鬼と、泥で遊ぶのは良い ですけれど、 お部屋を汚さないでください ね。

阿重霞はツンと言うと、 台所へ引っ 込んだ。 魎呼 は阿重霞が去っ た方向を睨むと、

「あのモグラみたいなの は何だ」

「あら、会った?」

「会った?じゃねぇだろ?あたし、 死ぬとこだったんだぞ!」

「死ぬは大袈裟じゃない?せいぜい怪我ぐらい . で…」

グッと、魎呼が鷲羽の胸倉を掴む。

「お前、彼処にあの妖怪が潜んでいるの、 知ってだろう。 知 0 てて あたし

りにしたんだろう」

「落ち着きなさいよ…」

「あ、魎呼さん、駄目ですよ

後からやって来た美星が魎呼を止めた。

「だって!」

「良いじゃないですか、魎ちゃんもお友達出来たんですから」

そうなのである。魎呼が悔しく思って怒っているのは、決死の覚悟で魎皇鬼達のところ のもの風景だったのだ。 に戻ると、魎皇鬼がモグラの妖怪と仲良くしており、 美星も笑っているという、 平和そ

達と会わせるつもりはなかったのよ。 のよ。ここ数日、天気が悪くて寒くなったから、裏山に招待したって訳。 「あの妖怪はね、春を呼ぶ生き物なのよ。 それは偶々」 あんたは知らないだろうけれど、 でも、

襟を直しながら鷲羽は説明をした。

「しゃあしゃあと言いやがって」

「今夜あいつと、 月見酒するけど、 魎呼 5 Þ λ 来る?」

「行くか!」

魎呼さんご一緒しない のなら、 私、 ご一緒して良いですか?」

だらけだった。 鷲羽は言うと、 玄関へ向かった。すると、魎皇鬼が、鷲羽を待ってい

「随分と遊んで来たわね

「みゃあん」

魎皇鬼は鷲羽の顔を見ると、 につこり 何かを鷲羽に差し出さした。

「ん?くれるの?」

「絵本に載っている花を鷲羽さんにあげたい見ると、それは真っ白い美しい花だった。 0 魎ちや λ ?頑張っ て探したんですよ」

美星が後ろから声を掛ける。魎呼もブスっとした顔で出て来て、

んだとさ」 「モグラの奴が持ってたから、魎皇鬼はすぐに奴と交渉して、花を貰って仲良くなった

ぶっきら棒に言った。

を見ながら、今日一日を呪った。しかし、魎呼の傍に居た美星は笑ってこう言った。 鷲羽は魎皇鬼の頭を撫で、魎皇鬼と何だか愉しそうに言い合っている。 魎呼はその姿

「春がもうすぐ来るって事は、桜の季節ですね、魎呼さん」

魎呼は考えた。桜の季節。満開の裏山。美味しい酒と夜桜。 そして天地…。

(ま、それならそれでも良いか)

単純な魎呼は、今から天地と二人きりの夜桜見物を想像し、 にんまりと微笑んだのだっ